2018.6.3　キリストの聖体

主の晩餐

マルコによる福音　14:12-16、22-26

除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか」と言った。そこで、イエスは次のように言って、二人の弟子を使いに出された。「都へ行きなさい。すると、水がめを運んでいる男に出会う。その人について行きなさい。その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい。」弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。
一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。はっきり言っておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

説教

イエスは受難を受け、復活し、聖霊を送る約束をして昇天しました。それだけではなく、過越しの食事、最期の晩餐の席上でパンとブドウ酒を弟子たちに与えました。わたしたちはこれをイエスの記念と解釈し、礼拝のなかで感謝の典礼、聖餐式としてイエスの聖体をいただきます。
思いもかけないやり方で、イエスはわたしたちのもとにそっと留まってくださいます。それがパンとぶどう酒の聖別であり、信じるものにとってイエス

の肉と血の臨在となっています。
聖餐はイエスさまの遺言であると同時に、イエス･キリストが今もわたしたちのもとに留まっておられるという現実です。イエスさまはわたしたち一人ひとりに親しく語りかけ、五感に響くようにわたしたちに触れられます。
きょうの聖餐は特にこのことを思いながらじっくりと受け止めましょう。

ところで、一生懸命に生きていたらいいことがある、こう慰められるとします。まったくそのとおりだ、くよくよしないで懸命に生きようと素直に受け止める人もいるでしょう。でも、うそっぱちだよ、そんなきれい事ですみっこない、と反発を覚える人も少なくはないとおもいます。この世は苦しいことだらけで、これからさきも同じ、お先真っ暗だよ、身も蓋もない言い方ですがこれも真実です。お釈迦様も生老病死（しょうろう-びょうし）生まれること、老いること、病むこと、死ぬことの四つの苦、それは人生における避けることのできない四つの苦悩だといっています。釈迦はそれを乗り越えるために煩悩をすてる、苦しみを捨てるという悟りを説き、悟りへの道を弟子たちに教えました。

イエスはどのようにされたか？

> **目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。**マタイ 11:5

獄中にある洗礼者ヨハネからの使いに対してイエスはこのように答えられました。イエスが受肉し、受難を受けたことで、わたしたちの苦しみは取り除かれているのです。
イエスは嘆き苦しむ人たちのかたわらに立ち、慰めてくれました。そして罪のないお方なのにわたしたちのために苦しみを負い、死んでくださいました。
イエスさまの十字架の贖いはわたしたちは救いとなりました。

わたしたちはイエスを記念し、イエスさまが教えてくれたやり方でパンとぶどう酒をいただき、いまもそこに密かにいる救い主イエスを感じることができます。キリストの聖体について一人ひとりがふかく想いをはせる一日となりますように。